摘錄

矢部長克及長尾巧　**日本下部白堊紀に出るプレカプロチナ新屬**（東北帝大理科報告地質學九卷一號二十一頁以下）Horiopleura yaegashii Yehara は初は江原氏によつて Plagioptychus と考へられてゐたが後に同氏がホリオプレウラ屬に編入した。一見なるほどホリオプレウラに似てゐるが嚴密には異つてゐる。故に此を Praecaprotina yaegashii (Y-ehara) と改名する。（横山）

矢部長克及半澤正四郎　**日本のオルビトリナを含める岩石の地質時代**（同上、同號十三頁より）日本にてオルビトリナを含む岩石の分布は(一)石狩空知川下流、(二)陸中下閉伊郡宮古の白堊紀地方、(三)阿波中郡羽之浦、及(四)土佐物部川谷の筌である。Orbitolina discoidea-conoidea var. ezoensis nov. は(一)で下アンモン介層に出(二)では蔓師砂岩に稀にある。O. Japonica nov. は(一)で前亞種の下位に澤山にある。本種の變種 Miyakoensis は(二)の平井賀砂岩にある。O. planoconvexa nov. は(二)に多し。オルビトリナ砂岩中 O. Shikokuensis nov. は(三)に出る。何れの種も地質時代の詳しい相關には有効でない。第一の變種の種はアプテイアンのもの。第二のヤポニカ及其變種は O. scutum と近くて同時代だらうが後者のボルネオに於ける層序上の位置未定である。北海道の方は他の化石上の事實からも一致するのでアプチアンとして差支なくしたがつて宮古の平井賀砂岩オルビトリナ砂岩はアプチアン上部とゴールトにまたがると思はる。羽之浦のものは明かに此よりも古い。（横山）

新著紹介

○地質學通論　理學士　森下正信著　菊版本文四三四頁　十五年九月　發行所東京市外西大久保　古今書院　定價參圓六拾錢

新しい研究を取り入れた地質學の手頃の本は我國に多くない。著者は松山高等學校での講義を整理して此の一書を編んだ。本書の目的とする所は中等教員檢定受驗者や、高等專門學校や其他技術者の參考に資する爲めである。章を分つ二十八、九章までは火山以外の地質作用を說いてあるがよく近代の地形學を錯綜させた點に於て殊に地理愛好者又は地理檢定受驗者を益する所が少なくない。第十章より第十八章までは火山と共に水成、火成、變成の岩類を論じ、其の岩漿の一章の如きは邦文書では今まで書かれなかつた最近の物理化學的研究の總括をして居る。第十九章乃至第二十一章は地殼の運動と地層の關係を述べてあるが、特に地震についての一章を缺いて居るのは日本の地質學書としては淋しい感じを與へ

る。第二十二章は化石、二十三章は日本の地質概要である。二十四章を成す日本の地帶構造一篇は矢部博士の校閲を經たもので各種の論議を簡にして要を得た筆で擧げてある第二十五章以下は地質及地形の野外觀察法、地形圖及地質圖の性質並に地層に關する作業の方法を説いて居る。

如上の內容を持つた本書は眞に地質學の通論を略網羅したもので殊に第二十五章以下は實際地質學書の稀な我國では有益なものである。たゞ本書に正鵠を得ない譯字や、誤用された漢字などの少からず眼に付くことは甚だ遺憾である。

depositを整層と譯したり、紹介とあるべきを照會としたり、ヴルテルがウォルサーになつたり、アリゾナのグランドカニオンがコロラドのになつたり、術語の獨逸語を新しく作つたりして居る。説明にも間々これはと思はれるものもないではない。石油と天然瓦斯を書いた見出しが動植物の建設作用とあるなどは多分明亮な誤植であらう。も一つの瑕瑾は日本での例を擧げることが少ないのと、好例が從來の著書にあるのに其れを採用しなかつた點である。本書にはこれ等の微瑾はあるものゝ我等の地質學參考書として新しくて且つ手頃のものであることに異議はない。(N)

○大陸漂移說解義　理學士　北田宏藏著　大正十五年十月廿五日發行　定價貳圓五拾錢

本書は新進の地理學者北田宏藏氏の新著である、ウェゲネルの大陸大洋の起原第三版は、今日英譯も佛譯もあるのに我國にはまだ充分な譯述がないのを遺憾として菊版三百四頁挿圖五十八の本書を出されたのである、編を分つこと三、第一編に漂移說を概論し、收縮說及陸橋說の缺點を剔抉して餘蘊なく、第二編には地球物理學的基礎及豫想をのべて地殼の平衡を詳述し、其依つて生ずる漂移を說き、第三編に漂移說の確證として地質學、生物學、及古生物學から立證し、或は極の位置から又は測地學の方面から考察の結果を丁寧に紹介してある、初學の人にはやゝ難解であらうと思ふけれども、とにかくこの書によつて奇才ウェゲネルの學說が明になり、從來の地理地形等を說明する上に於ての困難が、いかに手際よく排除されてゐるかといふことを知りうるのは何よりもうれしい事である、篤學の北田氏が流暢な文字によつて、適當な挿畫によつて、六ヶ敷い學說を平易にわかりやすく說いてあるに至つては更に敬服せざるを得ない、本年の文檢豫備にも地殼平衡說が問題に出た事である、思ふに地理學界は眞摯な本書の如き好著を迎へるに吝ならざるものがあらうと思ふ、古今書院が餘程出版に氣張つてゐる樣子もこの定價から見て首肯される、これ又ほめてよからうと思ふ。(藤田)

○大唐西域記に記せる東南印度諸國の研究　文學士　高桑駒吉著　大正十五年七月二十五日　東京森江書店發行　地圖五葉添付　菊版四百〇二頁、王朝系譜附、定價六圓

本書は啓明會の補助出版物である、文學博士南條文雄、同坪井九馬三兩大家の序跋がある、さこれ丈書いた丈けで本書

の評價は定まる、蓋し大唐西域記は大明の藏經に入つてゐる唐僧玄奘の渡天記である、西域及天竺を周行して地理風俗文化について極めて詳密に記されてあるから東洋歴史研究者の絶好資料である、ことに玄奘は歸來支那での新譯の巨擘で、唐以前の鳩羅什や其他の舊譯に就て音義兩譯の文字を正した人であるから佛教史上に於ても忘るべからざる恩人である、本書はこの玄奘の西域記第十卷中の跋摩栗底國から秣羅矩吒國に至る東印度の十國について、專ら其地理及歴史を研究せられた結果で、高桑文學士の篤學にして始めて成し得られたものである、其考證の該博にして論斷の嚴密なる、記述の豐富にして内容の充實せるは窃に予の自ら任ずる所なりと自慢してある、誰でもこれ丈自己の著述に冒頭しうることは出來がたいものであるのに、氏は更らに從來不安定なりし東南印度の歴史及地理に確實なる固定點を與へたりとのべてゐられる。これ迄西域記には故堀謙德氏の解説西域記があつたのであるが、今度この書を得て東南印度の方面が餘程精密に明にされたのである、即、跋摩栗底國、烏荼國、恭御陀國、羯餞伽國、南憍薩羅國、案達羅國、馱那羯磔迦國、珠利耶國、達羅毗荼國、秣羅矩吒國、寅に字を見る丈けでも、肩のこるやうな西域記の國名は、本書によつて其位置が明にされてきたのである、況んや其地理風俗、歴史が本書によつて明にされたのであるから、學界の爲めに慶賀せざるを得ない、蓋し近來の歴史地理學上の一大貢獻であると信ずる。（藤田）

雜報

○河内國中河内郡日下（クサカ）の貝塚

京阪地方には和泉に貝塚の地名はあつても從來貝塚として明かなものがなかつた本年十月大阪在住の齒科醫である八木博氏は中河内郡孔舍衛（クサカ）村日下（クサカ）で廣い貝塚を發見された。其の後京大文學部地理學教室の小牧講師が實地踏査の結果見聞された所によると、地は生駒山北西麓の緩斜地にあつて日下部落の西部の民居を夾んで南北一町餘に亘つて居り、表土一尺の下に厚さ一尺の貝層がある。貝層中からは繩紋系及無紋の土器が出、地表には讃岐岩から成つた石鏃が散布されて居る。この貝塚の貝は主にセタシジミで、他の多くは淡水産のもので現今の琵琶湖産のものと同樣である。猶稀に海からの入江にある海産の貝もある。是を以て觀ると生駒山の西麓地方の沖積層地には入江もあり、湖沼もあつたのであらう。それにしても此の貝塚は概觀して淡水貝塚と云へる。京大地質學教室の黒田氏の鑑定によると貝の種類は次の如くである。

Hyriopsis schlegellii (v. Martens) イケチフガヒ
Corbicula sandai Reinhardt (Var.) セタシジミ
Viviparus japonicus (v. Martens) ホホタニシ
Semisulcospira reiniana (Brot) チリメンカワニナ
Ostrea gigas Thunberg カキ